
ある秋の日

Ri

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある秋の日

【Nコード】

N9468A

【作者名】

Ri

【あらすじ】

私は世界で最も不幸な人間である。彼がいうにはどうやらそうらしい。僕は否定も肯定もせずにただ窓から外を見下ろす。

私は世界で最も不幸な人間である。

なにげなく窓を見下ろしていると君がそんなことを言った。

「…何いつてんの」

「私は世界で最も不幸な人間である、と言ったんだ」

君は僕が何を言ったのか聞き取れなかったと勘違いしたのか、先ほどと同じく極めて平坦な口調でそう言った。

「それはわかったよ。僕は君がなんでそんなことを言ったのかわからなかっただけさ」

「そのままの意味だ」

彼は今まで机に突っ伏してた頭を上げて僕を見る。
相変わらず視線を合わせるのが苦手なようだ。

「私は私かわからないのだ」

「私はなぜ此処にいる？」

「歩いてきた、だとか勉学を学びに来た、だとか」

「そんなことは聞きたくないのだ。なぜなら、」

彼は独り言（もしかしたら僕に話をしていたのかもしれないが）を

止めた。

僕が先ほど開けた窓から心地良い夏の風が流れ込んだ。窓から地面を見下ろせば老朽化した校舎の壁が見えた。外からは風の音以外は何も聞こえない。

彼は一度だけ僕に聞かせてくれたことがある。

夏は嫌いだと。

何故かはわからないし僕には特に興味が沸かない話題だったから

「ああ、そう」

とだけ言って会話を終了させたことがある。

いつもより卑屈で臆病な彼はいつか僕に言ったよう、ただ夏が嫌いだからこんな馬鹿みたいなことを言っているに違いない。

「それで、」

僕は口を開く。

「それで、僕にどうしろと？」

いきなり彼と話すのが酷く魅力的に感じなくなった。

しかし例え僕が彼に全く興味を示さなくなったとしても僕は彼から離れることは出来ないのだ。

そういう決まりなのだ。

彼が僕から離れることは無いし、その逆もまた無いのだ。なぜなら、彼は独り言を言っているからだ。

「さあ、もう帰ろう」

黒髪の青年が開け放たれた窓に向かってそう言った。

窓から見える景色から察するに今は秋の夕暮れであるようだ。
少し冷たい風がひゅうひゅうと枯れ葉を教室に運んできた。

「どうしたんだい」

青年は窓際にある植木鉢に向かってもう一度話しかける。

植木鉢の中央の植物はもうとくに枯れていたが枯枝には一匹のきりぎりすが寂しげに秋を恨んでいた。

きりぎりすは青年の手がその身に触れても逃げようとはしなかった。
きりぎりすは既に絶命していた。

その體は茶色く変色しからからに乾いていた。

青年はきりぎりすを摘み上げると声も無く泣いた。

私はは世界で最も不幸な人間である。

彼は世界で最も不幸なきりぎりすだ。

ただ夏を越し死んでゆく。

そこにある憂いも苦悩も秋には忘れられるのに。

それでも生命を途絶えさせない意味はあるのか。

例えお前が夏になり戻ってきたとしても、ただ私を苦しめるだけだ
というのに。

これが因果だというのなら、その原因すら分からぬ私はただの愚か
な人間か。

青年は独り言を言う。

きりぎりすは黙ってそれを聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468a/>

ある秋の日

2010年11月29日07時30分発行